

本当は美智子さま

5月1日、皇太子徳仁親王が即位され「令和」の時代が始まりました。ふと亡くなった母を思い出しました。母が生きていればこの日をどんなに喜んだことでしょうか。とにかく私の母は皇太子さまが幼少の頃の「浩宮さま」からの大ファンでした。なにしろ私は浩宮さまと同じ昭和35年に生まれていますから。



そんな母は、私が床屋さんへ散髪に行く時には必ずついて来て、いや私が連れられて、「浩宮さまと同じ頭にしておね！」と言って店へ入って行きます。わざわざ自宅から離れた母お気に入りの店です。若い従業員が多くいる当時にしてはちょっとお洒落なお店です。私が散髪をしている間も店のお兄さんの後ろに立ち指示を出している姿が鏡に映っているのを覚えています。「前髪は切り過ぎないで眉毛ぎりぎりの所で止めてまっすぐに揃えて!」。それが毎回のことですからお兄さんも気の毒だと子供ながらも感じていました。前髪を長くしていたから床屋さんへ行く頻度も多かったのでおさらです。私は浩宮さまの「坊ちゃん刈」スタイルは好きではありませんでしたが、このお店には活気があって行くのは好きでした。

母の浩宮さま好きは髪型だけにとどまりませんでした。母はミシンを使いこなす人で、通

勤帰りに岐阜駅前の問屋街で布を購入してはいろいろなものを手作りしていました。私が小



学校へ着ていく服も母の手作りか職場の同僚のお子さんのお古でした。「手作り」と聞こえは良いですが、今から思うとそれは浩宮さま

が通学されていた「学習院小学校の制服」風、モドキのものであったのではないかと思いつくと笑ってしまいます。たぶんテレビで放映されていた『皇室アルバム』などを参考にしたのでしょう。母にしたら力作だったことでしょう。当時、私の同級生の男子はみんな長ズボンをはいていました。私は学習院風の長めの半ズボンがどうしても嫌で、ある日母に直訴しました。すると母は、「東京へ行けば男の子はみんなそういう格好をしています。」と言いましたが、東京など行ったことが無い母の言葉はまったく説得力のないものでした。

私は小学4年生になる春から、一連の母の「浩宮さま風スタイル」から解放されました …。

当時の母のように女性が外へ働きに行き男性と同じようにお給料を貰ってくることは特別な時代でしたし、田舎町でしたので周囲からも批判をされたこともあったようです。そんな時、民間から初めて皇太子妃になられた美智子さまはご公務や子育てでその軋轢に対してもご苦勞をされました。母は美智子さまをお手本にしていたと感じます。母に代わり、「本当にお疲れさまでございました」と心から申しあげたいです。

俊徳丸